

湿原に生きる動物たち

橋 本 正 雄



釧路湿原は大正十三年のタンチョウ再発見以来、野生動物の宝庫といわれてきた。二〇万都市の釧路市にきびすを接する釧路

湿原が、今日なお広く原生自然を有するのは、人間を寄せつけぬ厳しい自然環境があるからである。人間にとっては共存し難い湿原の自然は、タンチョウをはじめとした湿原の動物たちにとって掛替えのないものである。近年の調査によると、蜻蛉四五種、蝶八四種、蛾八九二種、魚三〇種、両棲四種、爬虫六種、鳥一四九種、哺乳二三種だが、釧路湿原に生息することが知られている。

§ 湿原の生立ちを語る動物 §

湿原の東縁にある塘路湖には、海跡動物クロイサザアミが生息する。甲殻類のアミの一種で、体長一七ミリほどになる。本来は暖海に住み、日本中部以南から楊子江付近まで分布している。暖海の生物が寒冷な釧路湿原の淡水湖に生息するのは不思議な

ことであり、湿原の歴史をたどる必要がある。いまから五、六千年前は温暖な気候が続き、海面は今日よりも五メートルほども上昇した、縄文海進といわれる時代である。釧路湿原では海が奥深くまで侵入し、おぼれ谷であった塘路湖も海水で満たされた。こうして形成された古釧路湾には、ハマグリ、アカガイ、シオフキなど今日釧路近海では見られない暖海の貝が生息していたことが、釧路湿原周縁の貝塚から知られている。このような貝と同様に、暖海種のクロイサザアミも分布を広げていたものと考えられる。その後、海退がはじまるとおぼれ谷はその出口を閉ざされ湖となり、クロイサザアミも湖に陸封され、湖水の淡水化や気候の寒冷化にも耐え今日にいたっているのである。

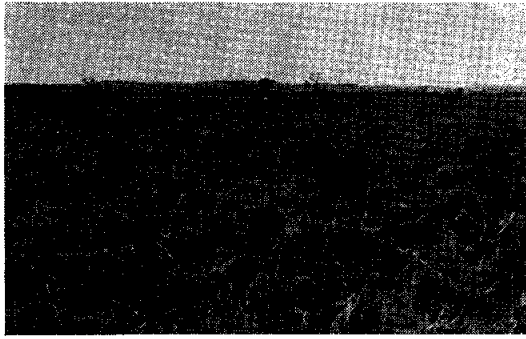
§ トンボの宝庫 §

釧路湿原には、湿原という環境を反映して四五種にのぼるトンボが生息し、その中には注目すべき分布を示すものが多い。シベリアなど大陸北方の寒冷地のトンボであるエゾカオジロトンボやイイジマルリボシヤンマのわが国唯一の生息地であり、また本州では高山の湿原に局所的に分布するカラカネイトトンボ、オオトラフトンボ、ムツアカネ、カオジロトンボなどが、湿原に散在する池沼でごく普通に見られるものとなっている。

§ 氷河期の遺存種

キタサンシヨウウオ §

北海道に広く分布するサンシヨウウオは全長一三〇ミリほどの全身黒褐色を呈する



キタサンシヨウウオ生息地



キタサンシヨウウオの卵塊

エゾサンシヨウウオであるが、釧路湿原にはもう一種、キタサンシヨウウオが生息する。キタサンシヨウウオは、全長一一〇ミリ前後とエゾサンシヨウウオよりやや小形であり、背に二条のオリブ色の縦縞を有する美しい種である。

キタサンシヨウウオの国外の分布は、千島、樺太、シベリア、東ヨーロッパと広いが、わが国では釧路湿原が唯一の生息地である。昭和二十九年、釧路市の中心より北西約一三キロの北斗湿原で最初に発見された後、釧路市周辺の湿原の数カ所で新たな生息地が確認された。しかし、近年の急テンポな湿原の開発行為により、それらの

生息地が次々と消失し、現在では、最初の発見地の北斗湿原が最後の生息地となりつつある。

キタサンシヨウウオは、氷河期に大陸から北海道へ渡来した氷河時代の遺存種といわれる。約二万年前、最後の氷期—ウルム氷期—の最盛期には、海面は今日に比べ一〇〇メートルほど低下し、水深五〇メートルの宗谷海峡、一〇メートルの間宮海峡は、大陸と北海道をつなぐ陸橋と化し、キタサンシヨウウオの渡来が可能になったわけである。五—十月の平均気温一二・七度霧日数一〇〇日以上である釧路湿原の冷涼な気候が、キタサンシヨウウオの生存を許しているようである。なお、キタサンシヨウウオは北海道、樺太の両棲類、爬虫類及び淡水無脊椎動物の分布の違いから、宗谷海峡を満州亜区とシベリア亜区との境界とする八田線の例外をなすものとしても興味をもたれるところである。

北斗キタサンシヨウウオ生息地は、スゲ類の隆起叢生したいわゆる谷地坊主が広がり、ヤチハンノキ林が点在する低層湿原である。夏季には牛馬の放牧に利用される比較的水位の低い地帯である。四月中旬—五月上旬、湿原に散在する小池で産卵がおこなわれる。卵塊は一对のバナナの房状を呈する卵のうに包まれ、一つの卵のうには六

〇—九〇個の卵が入っている。水草などに固定された卵塊は自然光下で美しい紫色の蛍光を発し、それは、湿原が造形したサファイヤづくりの芸術品の趣がある。

約三〇—ヘクタールに及ぶ北斗生息地で発見される卵塊は、一〇〇をわずかに超すだけである。このことからして、北斗における生息数は三〇〇匹前後と考えられる。唯一の生息地となりつつある北斗湿原は、草地造成の対象地となっており、この種の将来は悲観的なものといわざるを得ない。

§ タンチョウ

釧路湿原でタンチョウが再発見されたのは大正十三年のことである。一〇数羽が、今日なお湿原内で最も原始的景観を有し、踏査困難なところであるチルワツナイ川流域で発見されたわけである。それ以来、釧路湿原はタンチョウの住む地として衆人の関心を集めてきた。

昭和十年、タンチョウと釧路湿原の一部二、七〇〇ヘクタールが、「釧路のタンチョウ及びその生息地」として天然記念物に指定され、昭和二十七年にはタンチョウは特別天然記念物に昇格している。昭和二十五年には冬季の人工給餌がはじまり、二十七年からは毎年十二月にツル飛来地の児童・生徒が多数参加して、生息状況一斉調査

がおこなわれている。それによると、昭和二十七年三三羽であったものが、三十三年には一二五羽と急増し、四十四年二二二羽で二〇〇羽を越し、四十九年には二五三羽と最高羽数が確認されている。

タンチョウは、十一月に入ると釧路湿原で繁殖するもののほか、夏季、根室、十勝に分散していたものも、阿寒町や鶴居村など釧路湿原周辺二〇数カ所の給餌場に集まりはじめ、翌春まで夜は給餌場近くの河川を畔とし、昼は給餌場といった給餌場を中心とした生活に入る。阿寒町丹頂の里給餌場には、七〇羽を越すツルが飛来することも珍しくない。

二月下旬になると給餌場でも、タンチョウの求愛行動が見られるようになる。またヒナ連れの鳥はヒナを側に寄せつけぬようになり、子別れがおこなわれる。三月に入ると成鳥はつぎつぎと給餌場を去り、営巣地へと帰って行く。幼鳥・亜成鳥(タンチョウは四才で成鳥となる)は、成鳥の飛去後もしばらく給餌場にとどまり、四月になってから小群をつくり移動して行く。最近まで、幼鳥・亜成鳥の夏季の行動は不明であったが、ここ数年、釧路の給餌場から姿を消した彼らが、五月に入ると釧路の東約一〇〇キロの根室風蓮湖に現われ、三〇羽を越す群も確認されている。

営巣地は釧路湿原のほか厚岸町別寒辺牛川流域、浜中町霧多布湿原、根室風蓮湖、十勝大樹町など、道東一帯の湿地帯に分散している。昭和四十九年四月、北海道教育委員会が実施したヘリコプターによる営巣調査では、釧路管内には釧路湿原の三三カ所を含めて五六カ所、根室管内では風蓮湖周辺を中心に二九カ所、十勝管内で四カ所の営巣地が確認されている。生息数の増加にともない営巣地が、根室・十勝にも広がってきたわけである。

タンチョウは、繁殖期には二七平方キロという広い縄張りをもつといわれる。営巣地は巣材のヨシが密生し、餌となる水棲動物の豊富な川や沼近くの湿地が多い。しかし、個体数の増加に逆行して、営巣適地の湿原が年々開発されていることが原因なのか、これまであまり営巣に利用されなかったヨシのごく少ない、あるいはヤチハンノキ林に囲まれた湿地や、さらには離農後の牧草地など、いままでは考えられなかった環境に営巣するタンチョウが増えてきているといわれる。

営巣は、まだ湿原のどこどころに雪が残る三月中旬にはじまる。ヨシを嘴で切取り、積み上げた径一メートル以上の大きな巣をつくる。産卵数は二個が多く、雌雄による約三二日の抱卵で孵化する。誕生時の

ヒナは身長約一三センチ、体重二三〇グラム全身茶褐色の綿羽に包まれている。二三日で親とともに巣を離れる。ヒナの成長は早く、約三カ月で親に近い体格となり、飛翔可能となる。四才で成鳥となるが、その時には翼を広げると二メートルを越し、体重も一〇〜一五キロに達する日本最大の鳥となる。

国外では中国東北部、シベリア東南部に繁殖地があるが、生息数は少ないようである。釧路湿原という広大な未開の原野と、地元の人々の温い保護活動により、絶滅の危機を免がれたタンチョウではあるが、いま個体数の増加は頭打ちとなっている。

❧ 厳寒の湿原にみる

オオハクチョウ

夏の湿原はヨシ原はコヨシキリの勢力的な賑りに満たされ、湖沼ではマガモ、カイツブリ、アカエリカイツブリらが繁殖し、エゾイツツジやガンコウランなど高山植物に被われた高層湿原にはノビタキ、シマアオジの澄んだ声が流れ、周辺の雑木林ではセンダイムシクイ、エゾムシクイ、アオジラの賑りが響く。

キタヨシが枯れ、湿原が緑から黄金色の絨毯になると、一足先に夏鳥が去り、いつ時淋しくなった湿原にカモやオオハクチョウが飛来し、湿原の湖沼に彩りを添える。釧路湿原には毎冬、一千羽を越すオオハク

チョウのほかヒシクイ、キンクロハジロ、スズガモ、ホシハジロ、ミコアイサなど種々のガンカモが渡来する。

冬、湿原が厚く凍りつくのをまじ、水鳥の姿を求めて湿原の奥深くを訪ねると、散在する不凍の池沼では、ごく小さなところでもオオハクチョウやカモが掘起こしたマゼリやミツガシワの根茎が水面にいくつも浮かんでいる。湿原の厳しい自然の中で生活するオオハクチョウは、警戒心が強く人を寄せつけない。今日、日本各地でみられる人慣れしたハクチョウにはない厳しい野生の一面を示してくれる。だが、時にはユーモラスな姿も見せてくれる。人を目敏く発見し逃げ去ろうとしたところ、湿原を吹き抜ける強風におおられ失速、墜落し、もう飛ぶのは止めたとばかりに尻を大きく振り、氷原を走り去る姿は、なんともおかしな光景であった。

❧ じっと耐える動物

湿原の西縁を流れる仁々志別川には、たくさんのエゾアカガエルが越冬する。これは遠い昔から変らぬことである。ところでつい数年前、この川に沿ってアスファルトで舗装された道路が造られた。その翌年か

ら四月になると、路上には自動車に轢かれたカエルの死体が数キロにわたって累々とつづく。中には、雌をしつかりと抱接したままつぶされている雄もいる。越冬場所から湿原の産卵池に行くには、彼らはこの道を横切らざるを得ない。たくさんの仲間の死も、彼らの本能行動を止めることはできない。死をかけた行進が終り数日も経つと路上には黒いシミが残るだけで、そのシミの原因を知るドライバーはほとんどいないであろう。彼らの、この子孫のためへの殉教は近い将来に終ることも考えられる。このあたり一帯の湿原が、草地開発の計画に組み込まれている。まさに、いまの彼らは救いのない終焉への殉教をおこなっているのである。釧路市大栗毛の湿原に広がるヤチハンノキの林に、毎年、アオサギのコロニーがつくられる。昭和三十年頃までは、二〇〇以上の巣が掛けられたという。その後、コロニー近くに大規模な製紙工場ができた。工場の鼻をつく排煙は、海風に乗り湿原へと流れ込む。アオサギの巣も、それから免れることはできない。また、工場に起因した住宅地の発展も大きい。このコロニーが崩壊するのは、時間の問題である。

昨年はコロニーに残る三〇〇個の巣の、ごく少数のものが営巣に使われたにすぎない。